

## 地理資料シリーズ

# 砂漠の都市 アリススプリングスと 先住民アボリジニー

### 【右写真解説】

オーストラリア大陸中央部の乾燥した赤い大地に開設されたのが、ノーザンテリトリー第2の都市アリススプリングスである。写真は、この町を北から南に向かって撮影した。

写真上部に見えるのはアリススプリングスの南に広がるマクドネル山脈である。比較的単調な地形が続くオーストラリア中央部にあって、この山脈では、南のグレートアーテジアン（大鑽井）盆地側に潜り込むような褶曲した地層を見ることもできる。写真に見られるように、街区の南に峡谷があり、川や道路、鉄道が走る町の南側の玄関口となっている。写真のほぼ中央を南北に貫いているのが、大陸を縦貫する幹線道路スチュアートハイウェイと全長3000kmに達する南北縦貫鉄道（通称：ガン鉄道）である。「アジアのなかの国家」をめざすこの国では、ダーウィンで太平洋につながるこの2つの幹線に大きな期待がよせられている。

（写真：帝国書院 2006年9月撮影）

アリススプリングスは、赤い大地がひろがる中央砂漠の都市という意味で、レッドセンターの名で親しまれている。その歴史は、1872年にここに大陸縦断電信線（オーバーランド・テレグラフライン）の基地がおかれたことに始まる。それは先住民アボリジニー（アボリジナル）にも多大な影響をもたらすことになった。

この地を生活の領域にしてきたのは、先住民アボリジニーの1集団アレンテ（アランダ）の人たちである。そこに電信線の基地が建設され、その数年後の1877年にはアリススプリングスの南150kmのハーマンスバーグにキリスト教ルター派が伝道所集落（ミッションセツルメント）を開設する。これらが砂漠への植民の拠点となった。たとえばこの地のルター派は、アボリジニーの宗教を全面的に否定したのだった。こうしてアレンテの人たちは、思いのほか早くに植民地の圧力にさらされることになった。南部の都市アデレードへの植民が1836年であったことを考えれば、その早さがうなずけるだろう。彼らは100年以上にわたって植民地支配のもとにおかれてきた。

しかし、年平均降水量が240mm程度のこの地域へは、牧畜業は断続的にしか展開しなかった。そのためアレンテより内陸の西部砂漠地域に暮らしてきた先住民ピチャンチャチャラやピンタビの人たちは、ヨーロッパ人の影響をあまりうけなかった。それは1950年

代に、同化を目的に政府が建設したアボリジニー集落に居住してからのことだった。その後1960年代になると、アレンテやピチャンチャチャラなど砂漠の先住民は、現金収入を求めアリススプリングスに移住しはじめる。その背景には20世紀になって展開した牧畜産業の機械化による失業や、アボリジニーへの賃金差別を禁止する法律の施行（これを機に牧場主はアボリジニーを解雇した）があった。砂漠の先住民の一部はこうして都市の居住者になっていった。そうした歴史のなかには、1960年代までつづいた混血アボリジニーを親元から強制的に引き離し、ヨーロッパ式教育を施した政策も含まれる。砂漠に生まれた混血アボリジニーは、アリススプリングスの施設に収容されていた。

現在、この町の基幹産業は観光である。その中心をなすのが、ウルル・カタジュタ国立公園をはじめとするアボリジニー・ヘリテージツアーで、なかには彼らの言語などを体験するものもある。それを支えるのが土地への回帰である。1970年代以降アボリジニーはこの町や政府が建設した集落を離れて本来の居住地に戻り、祖先伝来の土地での生活をはじめている。その地にまつわる神話・伝承はこうして輝きを取り戻し、それは絵画作品となってアリススプリングスのアボリジニー・アートギャラリーを埋め尽くしている。

（国立民族学博物館 松山利夫）

\* オーストラリア先住民については、教科書に合わせて「アボリジニー」を用いた。

しかし、彼らのなかにはこれを好まず、Aboriginal People という表記を求める人びとがあり、筆者は「アボリジナル」のほうがより適切だと考えている。



